

なのは負けず嫌いだ。

意地っ張り、とでも言うのだろうか。さすが「不屈の魂」と呼ばれるデバイスのマスターだけあって、その意志の強さは並大抵のレベルじゃない。

それを最初に実感したのは、もう十年以上前。あの洋上の戦いでなのはと正面から戦って負けた、あのときのなのはの強さは、その魔力の大きさや空戦のセンスといった技術的なこと以上に、まず何よりも心の強さだったと思う。

それよりも前、なのはがアリサやずずかと仲良くなったときも最初はケンカから始まったそうだし、なのはのそういうところはもうずっと昔から変わっていないんだろう。

そんななのはだけれど、自分の娘とまで意地の張り合いをやるのは、平和な家庭の維持のためにももう少し加減して欲しい。

いま私の目の前でむくれている、でもちよつとだけ泣きそうな顔をしたなのはは、それはそれでとても可愛らしいのだけだ。

そう、なのははとても可愛い。それを実感したのももう十年以上前。海鳴の公園でなのはに告白して互いに抱きしめあった、あの時からだ。

それ以前から可愛らしい娘だな、とは思っていたけれど、あのころの私はそれどころじゃなくて、いま思えば本当にもったいないことをした。

とくに友達になりたい、と言ってくれたときのなのはなんてもう最高に可愛くて、バルディツシュに録画しておいてもらわなかったことを真剣に悔やんでいるくらいだ。

その後、何度か交換しあったなのはとのビデオメールは今でも私の宝物だ。再会したあともずっと録り続けているのはの成長の記録と合わせて、私のはのライブラリーに大切に保存してある。

いつか一度、これまでの十年間を振り返る意味でも一気に全部見てみたいと思っているのだけれど、どう考えても一ヶ月以上はかかりそうなので躊躇している。ヴィヴィオを誘って一緒に見ようとしたこともあったけど、何故か丁寧にお断りされたし。

まあしかし、映像の中の思い出のはももちろん可愛いんだけど、やっぱり本物にはかなわないかなと思う。

「うううう……」

怒ってるのか泣いているのかわからないような謎のうなり声をあげてテーブルに突っ伏しているのは。どうやらそうとうご機嫌ナナメなようだ。

まあ仕方ない。こと管理局、空戦においてはエースオブエースと呼ばれるような存在であっても、子育てについてはまだまだ経験一年の初心者だ。なかなか上手くいかないこともある。

「もう、なのはったらヴィヴィオ相手にむきになりすぎだ

よ

「うー……」

ふわふわと揺れるサイドテールを指先で梳くようになってると、なのははゆつくりと顔を上げた。

「本当に、親子そろって負けず嫌いなんだから」

「うー、それはフェイトちゃんだって同じでしょ」

ジト目でこちらをにらんでくるなのは。

「私もたしかにそうだけど、なのはほどじゃないよ」

「そんなことないもん。フェイトちゃんのほうが負けず嫌いだもん」

ほら、もうこの時点でなのはは絶対に譲らない。

幼い頃は、それでケンカしたことも何度かあった。二人して相手のほうが負けず嫌いだと散々主張したあげく、アリスに怒られるまで口をきかなかつたりもした。

さすがにいまではそんなことも無くなつたけれど、それはただ大人になっただけで、性格そのものが変わったわけじゃない。

「ほら、なのは、機嫌なおして」

「べつに、機嫌悪くないもん。普通だもん」

「はいはい。ほら、テーブル吹くから、体を起こして」

「むー」

よろよろと上半身を起こし、そのまま今度は椅子の背にもたれかかるのは。

「はい、よくできました」

「フェイトちゃんが子供扱いするー!」

「そういうところは、子供と同じだよ」

「子供じゃないもん! フェイトちゃんと同じ年だもん!」
意地っ張りで頑固ではあるけれど、人の話に聞く耳をもたないとか、そういった固さはなのはには無かった。

間違いを指摘されることがあればすぐに受け止めて直すし、上司、同僚、部下問わず参考になる意見や考えは積極的に取り入れていくし、仕事の上でも私生活でもそのあたりは同年代の他の子たちと比べてもかなり柔軟だと思う。

ただ、心のなかに常にぶれない芯のようなものが一本通っていて、それを曲げることは絶対に無いというだけだ。

その芯も子供の頃はかなり太くて、ちよつとしたことでもすぐにその芯に触れてしまつて、それを曲げることが出来ずに言い争いになっていたりしたけれど、最近ではその芯もだいたいぶ細くなつて、本当に大切なこと以外では触れることも無くなつた。

ただそのぶん残つたその芯はとても固くて、曲げることはもうなのはは本人にも不可能なレベルになつてしまつていくけれど。

「さて、じゃあ洗い物しようかな」

「私がするから、フェイトちゃんは休んでて」

「大丈夫だよ。なのはこそ、今日も教導で疲れてるでしょ」

「フエイトちゃんだって、わたしよりも遅くまでお仕事だったよ」

「私は、今日は書類仕事だけだったから。なのはこそ、明日お休みするからってここんとこ毎日頑張り返りすぎてた」

「そんなことないよ。これくらい普通だもん」

「はいはい。じゃあ普通に頑張ってたなのは、普通に休んでてね」

立ち上がろうとするなのはを肩に手を置いて制してから、そのままさっさとキッチンに入ってしまう。

なのはもそれ以上追ってこようとほしなかった。やはり、多少なりと疲れは溜まっているんだろう。

今日は早めに寝かせてあげないと。

そのためにも、まずはパパッと片付けを終わらせてしまおうと、私は腕まくりしてシンクの中に積まれた食後の皿、三人分を手を取った。

「あ」

そのお皿の中の一枚、そこに残されたニンジンのグラッツセを見て、思わず苦笑してしまう。

どうも、なのはの中の「絶対に曲げられない芯」は、こと娘……というより子育て方面については、幼いころのようなかなか太いものに戻ってしまっているらしい。

まあきつと、それだけヴィヴィオのことが大切だっということなんだろうけど。

それにしても……と私は改めて思う。

なのはとヴィヴィオは、本当にそっくりな親子だなあ、と。

先ほどの、夕食時の二人のやりとりを思い出して、私はまた苦笑いするのだった。

「フエイトママ！ おかえりなさい！」

玄関に入るなり、待ちかまえていたかのように飛び出してきたヴィヴィオを抱き上げて、そのわずかに赤みがかったふわふわの頬にキスをする。

「ただいま、ヴィヴィオ」

「おかえりなさい！」

少しくすぐったそうにしながら微笑むヴィヴィオの顔を見ていると、それだけで一日の疲れが取れていくような気がして、私もつい頬がゆるんでしまう。

癒される、とはこういう感覚をいうんだろう。

「ほらヴィヴィオ、フエイトちゃんお疲れなんだから、あんまり甘えちゃだめだよ」

「フエイトママ、おつかれ？」

「ヴィヴィオの顔を見たら、疲れも吹き飛んだよ」

それはお世辞でも常套句でも無い単なる事実だ。ヴィヴィオの笑顔は、それだけで私の身も心も回復してくれる。「フエイトちゃん、おかえりなさい」

そして、そんな私たちをほんの少しだけうらやましそうな顔で見つめてくる、私にとつてもう一人の癒し手。「ただいま、なのは」

なのはの頬に顔を寄せて、同じようにキスをする。

もちろん、ヴィヴィオは抱きかかえたまま。なのはとヴィヴィオの笑顔に挟まれる。私にとつて至福の時間だ。

「……ん、良い匂いがするね」

キツチンのほうからただよってくる芳香に、思わず鼻をひくつかせる。

「ふふ、もうすぐご飯出来るから、フェイトちゃんも着替えてきてね。戻ってくるまでに支度しておくから」

「了解、でも慌てなくていいからね？」

「大丈夫だよ。ヴィヴィオも手伝ってくれるし」

「ヴィヴィオもお手伝いする!」

「うん、じゃあよろしくね」

ヴィヴィオの頭を軽く撫でて見送ったあと、私は奥の寝室へと向かった。

執務官の制服を脱ぎ、シャツの襟元をゆるめて一息つく。

「明日はお休み、か」

ここしばらくは長期任務も無く、やることと言えば事務処理や法務関係の書類整理など一日中机に向かっていることがほとんどで、正直なところ少しばかり息の詰まる日が続いていた。

もちろん執務官が前線に立つような荒事など無いにこしたことはないし、それはそれで平和な証拠なのかもしれないけれど、何というか、そういう仕事の繰り返しは精神的に疲れることが多い。

そういう意味で、明日の休暇は楽しみだった。なのはも合わせて都合をつけてくれた、久しぶりの三人揃つての休日。

幸い体力は有り余っていることだし、久しぶりに童心にかえつて遊ぶのもいいかもしれない。

なんて言ったら、またなのはにフェイトちゃんは子供っぽい、なんて言われそうだけど。

でも、明日は特別な日だし。

そんなことを考えながらリビングに向かうと、すでにテーブルの上にはなのは自慢の手料理が所狭しと並べられ、一通りの支度を終えた二人がちょうどキツチンから戻ってきたところだった。

「わ、なのは、今日はぜひぶん豪華だね?」

「えへへ、明日お休みだから、ちょっと奮発しちゃった」

小さく舌を出し、いたずらつぽい笑みを浮かべるなのは。ああ、ご飯もいいけどまずなのはを食べたい。

そんな欲求をぐつと堪えて席に着く。向かいにヴィヴィオ、その隣なのは。いつもと変わらない食卓の風景だ。

「いただきます!」

声をそろえて挨拶して、さっそく目の前のお皿に手をつける。

「……ん、なのは、ちょっと味付け変えた？」

と、舌の上にかすかに違和感を覚えて、私はなのはに視線を向けた。

いつもよりちょっと塩分濃い目。これはこれで美味しいけれど、私のよく知っているなのは料理の味とは少し違う。

「わ、さすがフェイトちゃん」

嬉しそうに笑いながら、なのはは隣のヴィヴィオの肩に手を乗せた。

「ほら、ヴィヴィオ」

なのはの言葉に、それまで黙ってこちらをじっと見つめていたヴィヴィオが、おそろおそろ口を開く。

「あ、あの、フェイトママ、お、美味しい？」

ああ。

なるほど、そういうことか。

私は同じお皿の料理にもう一口手をつけると、少しじらすように間を置いてから、おほん、と咳払いをしてヴィヴィオに向かつて微笑みかけた。

「うん、美味しいよ、ヴィヴィオ。また上手になったね」

とたんに、ヴィヴィオの顔がまるで夏の花のように明るく輝く。

「わーい！ ありがとうフェイトママ！」

今にも椅子から飛び上がりそうになったヴィヴィオを、隣のなのはが慌てて押さえた。

「さすがなのはママの娘だね。これなら、ママを越える日も遠くないかも」

「あー、フェイトちゃんひどい。まだまだ、娘には負けてられません」

少しむくれたような顔をするのは。

「うん、なのはもヴィヴィオも頑張つて。そうしたら、私は毎日美味しいご飯が食べられて幸せだから」

「えー、でもわたし、フェイトちゃんの手料理も食べたいな」

「わたしもフェイトママのごはん食べたい！」

「うーん、でも、私の料理なんてなのはママには全然かわないからなあ……」

自分も一応最低限の食事くらいは作れるけれど、なのはの作ってくれるそれには全くといっていいほど及ばない。

さすがは海鳴の名店、喫茶翠屋の娘だと思ふ。

「そんなことないよ。フェイトちゃんの作ってくれるご飯は、なんだか凄く優しくて美味しいの」

「わたし、フェイトママのご飯もなのはママと同じくらい大好きだよ！」

ところがなのはとヴィヴィオは、二人揃ってそんな私の料理を、好きだ、と言ってくれる。

もうそれだけで思わず泣きそうになるのをなんとかこらえて、私は二人にうなずいた。

「ありがとう、じゃあ、今度は私が、腕によりをかけてご馳走を作るね」

「うん！」

私の言葉に嬉しそうにうなずいてくれる二人。ああ、これはもう生涯最高の料理でもおてなししなければ。

「でもほら、まず目の前の、なのはとヴィヴィオが一生懸命作ってくれたごちそうを堪能しないとね」

そうだ。せっかくなのはが「奮発した」という今日の夕食。冷めたりしてしまつては、バチが当たるといふものだろう。

少し照れくさかったこともあって、それから私は少しだけがつつくように、副菜、主菜、汁物と次々に手を伸ばしていった。

「あのね、それでね、先生が褒めてくれて」

向かい側では、ヴィヴィオが今日学校であったことを楽しそうに報告してくれている。

通い初めて一年、最初は馴染めるかと不安もあったが、それはどうやら杞憂だったようで、今では友達もたくさんできて、毎日学校に行くのが楽しみで仕方ない様子だ。

「でもねヴィヴィオ、苦手なところもちゃんと勉強していかないよ、あとで苦労するんだよ」

一方のなのはは、少しお説教モードだろうか。

管理局では優秀な教導官として周囲の評価も高いのはだけど、ヴィヴィオのこととなるとどうもまだなのは自身手探りのようなところがあつて、ついつい厳しい言葉を投げってしまうことがある。

「うう……だつて……」

ヴィヴィオが肩を落としてうつむいてしまう。ああ、これは助け船が必要かな。

「まあまあ。いまはまだ、好きなところとか得意なところを伸ばしていけばいいと思うよ」

どうやらヴィヴィオは得意な箇所と苦手な箇所、好きなところと嫌いなところの差というのがかなりはつきり出ているらしい。

そのあたりは、まだまだヴィヴィオも小さい子供だ。今は無理に苦手なことをやるより、好きなことを伸ばして、勉強が嫌いにならないようにするのが大切だろう。

まず長所を伸ばす。これは、幼いころ私に魔法の基礎を教え込んでくれた、リニスの方針でもあつた。

ただ、どうもなのはは、私とは考え方が違うようで。「だめだよ。苦手だからつて避けてばかりいると、いつまでも立っても逃げたままになっちゃうんだから」

それも正しいとは思ふ。でも、それはもう少しヴィヴィオが成長してからでも遅くはないんじゃないだろうか。

ヴィヴィオはすっかり落ち込んでしまったようで、下を向いたまま肩を振るわせていた。

「なのは」

少し言い過ぎかな、と私がなのはを止めようとしたとき。

「ほらヴィヴィオ、ちゃんと嫌いなものも残さず食べないと。そんなことだと、勉強と一緒にいつまでたっても好きなことしか出来なくなっちゃうよ」

その言葉に、ヴィヴィオの中でなにかが弾けたらしい。

「そんなことないもん！ 好き嫌いとは勉強は違うんだから！」

顔を真っ赤にして、ヴィヴィオがなのはを睨むように叫んだ。

「同じだよ！ 食べ物も勉強も、好き嫌いしたら大きくなれないよ！」

「ご飯だって、好きなものだけでもいっぱい栄養あるんだから！」

お、ヴィヴィオの反論もあながち間違つてはいないかも。

なんて感心している場合じゃない。

「ほら、なのはもヴィヴィオも、せっかくのごちそうなんだから」

「ごちそうだって、ちゃんと全部食べないと意味ないよ！」

「意味無くない！ 食べたいのだけ食べてるほうが美味しい！」

ああ、こうなってしまったら、もう割って入っても火に油を注ぐだけだ。

私は二人のやり取りを眺めながら、刺激しないようにそこそと残った食事をお腹の中に入れていく。

食事が中断してしまったのは残念だけれど、残して捨てるのはもったいなさすぎる。

「うううううう……なのはママのばかー！」

おっと、どうやらヴィヴィオが先に言葉が尽きたらしい。

いわゆる捨て台詞のようなものをはいて、ヴィヴィオはリビングを飛び出してしまった。

「あ……」

ヴィヴィオを引き留めようとして手を伸ばすのはだったが、ときすでに遅く。

荒々しく可愛らしい足音が寝室のほうへ遠ざかっていくのを聞きながら、なのはそのまま倒れ込むようにして、テーブルに突っ伏してしまったのだった。

洗い物を終えて戻ってくると、なのはは相変わらず、心ここにあらずといった感じでうつろに中空を眺めていた。やれやれ、と心の中で溜息をつく。

どうやら一人取り残されていた間に頭が冷えたらしく、もうはつきりと顔に縦線が入って見えるくらいになのはは落ち込んでいた。